

第 11 回（平成 27 年度）
教育システム改善のためのアンケート調査報告書

平成 28 年 5 月

有明工業高等専門学校
学校運営検討委員会

目次

1. まえがき	1
2. アンケート結果およびその分析	4
2.1 5年生卒業時アンケート	4
2.2 専攻科修了時アンケート	14
2.3 新入生保護者アンケート	16
2.4 4年次編入生アンケート	19
2.5 OB・OGアンケート	21
2.6 企業アンケート	23
3. あとがき	26

付録 アンケート内容と集計結果

- 付録1 5年生卒業時アンケート（平成27年2月実施）
- 付録2 専攻科修了時アンケート（平成27年1月実施）
- 付録3 新入生保護者アンケート（平成27年3月実施）
- 付録4 4年次編入生アンケート（平成27年5月実施）
- 付録5 OB・OGアンケート（平成27年9月実施）
- 付録6 企業アンケート（平成27年9月実施）

1. まえがき

本校では、教育理念に基づいて設定された学習・教育到達目標を達成できるように教育プログラムを設計・作成し、日々の教育活動を展開しています。この教育プログラムに沿って教育を実行しているという本校の教育システム（教育体制）は、常時、点検・評価を行い、その結果を検討・分析し、継続的に改善を施し、向上させて行く必要があります。

学校運営検討委員会（以下、本委員会）は、本校の教育システムの点検、分析そして改善・向上の一環として、毎年、7種類のアンケート(一部隔年)を実施しています。学内では、卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、4年次編入生の3種類、学外では、OB・OG（本校卒業生）、企業（本校卒業生が就職している）、新入生および2年生の保護者*の4種類です（詳細は、表1を参照）。そして、これらのアンケートの結果を集計、分析し、改善点を「教育システム改善のためのアンケート調査報告書」（以下、調査報告書）として作成・公開し、教育システム改善・向上の一端を担ってきました。

今回の調査報告書の対象は、平成26年度の卒業・修了直前の本科5年生・専攻科2年生、平成27年度4年次編入生、OB・OG（卒業生）、企業、平成27年度新入生の保護者となります。

本調査報告書は、各アンケートをそれぞれ集計し、主に前年度の結果と比較し分析を行いました。

上記アンケート対象者による今回の調査結果から、全体として、本校の教育システムは平成25年度までと同じくおおむね良好な状態であると言えます。

* 2年生の保護者に対するアンケートは平成18年度から平成22年度まで実施。

表1 アンケート実施・分析状況一覧

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第1回	平成14年度	H15年1月	H14年度専攻科修了生	H16(2004)年 3月	JABEE 作業部会
		H15年2月	H14年度本科卒業生		
	平成15年度	H15年7月	OB・OG		
		H15年11月	主な就職先企業		
第2回	平成15年度	H16年1月	H15年度専攻科修了生	H17(2005)年 6月	JABEE 作業部会
		H16年2月	H15年度本科卒業生		
	平成16年度	H16年6・9月	OB・OG		
第3回	平成16年度	H17年2月	H16年度専攻科修了生	H18(2006)年 6月	学校運営 検討委員会
		H17年2月	H16年度本科卒業生		
	平成17年度	H17年12月	OB・OG		
		H17年12月	主な就職先企業		
第4回	平成17年度	H18年1月	H17年度専攻科修了生	H19(2007)年 7月	学校運営 検討委員会
		H18年2月	H17年度本科卒業生		
	平成18年度	H18年4月	H18年度新入生保護者		
		H18年7月	H18年度2年次保護者		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第5回	平成18年度	H19年1月	H18年度専攻科修了生	H20年(2008) 6月	学校運営 検討委員会
		H19年2月	H18年度本科卒業生		
	平成19年度	H19年4月	H19年度新入生保護者		
		H19年4月	H19年度4年次編入生		
		H19年8月	H19年度2年次保護者		
		H19年12月	O B ・ O G		
		H19年12月	主な就職先企業		
		H20年2月	H19年度専攻科修了生		
		H20年2月	H19年度本科卒業生		
		H20年3月	H20年度新入生保護者		
		平成20年度	H20年4月		
	H20年9月		H20年度2年次保護者	H20年9月	(追加版)
第6回	平成20年度	H21年2月	H20年度専攻科修了生	H21(2009)年 9月	学校運営 検討委員会
		H21年2月	H20年度本科卒業生		
		H21年3月	H21年度新入生保護者		
	平成21年度	H21年4月	H21年度4年次編入生		
		H21年8月	O B ・ O G		
		H21年8月	主な就職先企業		
第7回	平成21年度	H22年2月	H21年度専攻科修了生	H23(2011)年 7月	学校運営 検討委員会
		H22年2月	H21年度本科卒業生		
		H22年3月	H22年度新入生保護者		
	平成22年度	H22年4月	H22年度4年次編入生		
		H22年9月	H22年度2年次保護者		
		H23年2月	H22年度専攻科修了生		
		H23年2月	H22年度本科卒業生		
		H23年3月	H23年度新入生保護者		
		平成23年度	H23年4月		
	第8回	平成23年度	H23年9月		
H23年9月			主な就職先企業		
H24年2月			H23年度専攻科修了生		
H24年2月			H23年度本科卒業生		
H24年3月			H24年度新入生保護者		
平成24年度		H24年5月	H24年度4年次編入生		

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第9回	平成24年度	H25年1月	H24年度専攻科修了生	H25(2013)年 7月	学校運営 検討委員会
		H25年2月	H24年度本科卒業生		
		H25年3月	H25年度新入生保護者		
	平成25年度	H25年4月	H25年度4年次編入生		
第10回	平成25年度	H25年9月	OB・OG	H26(2014)年 10月	学校運営 検討委員会
		H25年9月	主な就職先企業		
		H26年1月	H25年度専攻科修了生		
		H26年2月	H25年度本科卒業生		
		H26年2月	H25年度全学生		
		H26年3月	H26年度新入生保護者		
	平成26年度	H26年5月	H26年度4年次編入生		
		H26年7月	H26年度全教職員		
第11回	平成26年度	H27年1月	H26年度専攻科修了生	H28(2016)年 3月	学校運営 検討委員会
		H27年2月	H26年度本科卒業生		
		H27年3月	H27年度新入生保護者		
	平成27年度	H27年5月	H27年度4年次編入生		
		H27年9月	OB・OG		
		H27年9月	主な就職先企業		
第12回	平成27年度	H28年1月	H27年度専攻科修了生	H28(2016)年 9月(予定)	学校運営 検討委員会
		H28年2月	H27年度本科卒業生		
		H28年3月	H28年度新入生保護者		
	平成28年度	H28年4月	H28年度4年次編入生		
		H28年8月	H28年度全学生		
		H28年8月	H28年度全教職員		

2. アンケート結果およびその分析

2.1 5年生卒業時アンケート

現在までに実施した5年生卒業時アンケートの実施状況は表2-1-1のとおりである。平成26年4月の5年在籍者数、200名（M:44, E:43, I:43, C:36, A:34）の内、留年者2名、休学者1名を減じ、平成26年度の卒業生数は197名（M:43, E:43, I:43, C:34, A:34）である。

5年生在籍者の198名を対象にWeb入力によるアンケートを行った。アンケート回答者数は186名（M:39, E:41, I:42, C:31, A:33）であり、回答率は183/198=94%であり、比較的高い回答率となった。

表2-1-1 5年生卒業時アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数 (名)	回答者数 (名)	回答率 (%)
平成14年度	平成15年2月	177	161	91
平成15年度	平成16年2月	165	160	97
平成16年度	平成17年2月	190	180	95
平成17年度	平成18年2月	186	178	96
平成18年度	平成19年2月	192	178	93
平成19年度	平成20年2月	167	163	98
平成20年度	平成21年2月	171	168	98
平成21年度	平成22年2月	185	171	92
平成22年度	平成23年2月	174	170	98
平成23年度	平成24年2月	193	188	97
平成24年度	平成25年2月	180	177	98
平成25年度	平成26年2月	180	180	100
平成26年度	平成27年2月	198	186	94

【A：回答者自身に関する質問】

平成26年度の5年生の学生数は4月時点では200名（休学者0名、留年者1名、研究生1名含）が在籍しており、内、留年者2名、研究生1名を除く、197名が卒業している。入学当時（平成22年度、M40, E42, I41, C43, A41, 教務係調査による各科人数）は207名、4年次編入学生（平成25年度、M3, E2, I4, C2, A2）13名、3年次編入留学生（平成24年度、M1, C1）2名が入学しており、計221名であった。また、1年次の在籍者数（前年度休学者、留年者を含む）は（M42, E42, I47, C43, A42）216名であった。

『卒業後の進路』は全体では69%（129名）の学生が「就職」であり、平成25年度の65%（117名）よりも4ポイント増加している。逆に進学率が32%から27%へと減少している。進学率のここ数年の推移を見てみると、平成22年度は42%のかなり高い率であり、平成23年度に29%まで大きく減少、さらに平成24年度は25%まで低下したが平成25年度は32%まで上昇し、平成26年度は再び28%へ減少している。平成24年度の進学率の低下を除けば、ここ数年は30%弱前後となっており、ほぼ定着している。5年生全体に対する「大学」への進学は13%（23名）であり、平成24年度（15%、26名）と平成25年度（15%、27名）よりもやや低下している。「専攻科」への進学は15%（28名）であり、平成25年度17%（29名）に比して2ポイント減少している。また、3.4%（6名）の学生が「進路未定」と回答しており、平成25年度の4.0%（7名）とほぼ同じである。

平成26年度の進学の中で大学への進学率が45%、専攻科のそれが55%となり、平成25年度とほぼ同じ割合（大学：48%、専攻科：52%）となった。

進学の中で、改めて、専攻科への進学を見てみると、平成24年度に専攻科定員20名に対して19名と初めて定員を下回ったが、平成26年度は、上述の通り、アンケート上では28名（実際は32名）と増加している（H14:20名, H15:28名, H16:22名, H17:24名, H18:25名, H19:36名, H20:32名, H21:26名, H22:31名, H23:32名, H24:19名, H25:29名, H26:32名）。平成24年度卒業生の専攻科入学が大幅に減少したのは一時

的なものであるという可能性が大きいと言える。

平成 26 年度の進学者の内訳をしてみると機械工学科は専攻科進学者数(アンケート上は 7 名であるが実際は 9 名)が大学進学者数(4 名)の 2 倍以上と際だっている。電子情報工学科も大学進学者数 6 名に対して、専攻科進学者数は 9 名と多い。電気工学科、物質工学科、建築学科の 3 学科は大学進学者数と専攻科進学者数はいずれも 4 名前後である。例年、電気工学科の専攻科進学者はほとんどが大学院へ進学しており、進路指導に何らかの方針があるのではないかと考えられる。

また、平成 23 年度に定義された「卒業率」について、平成 26 年度は 197 名/221 名=89.1%であり、平成 25 年度の 80.7%(H24 年度 82.7%, H23 年度 89.8%)よりも 8 ポイント増加し、平成 24 年度よりも 6 ポイント増加しており、平成 23 年度とほぼ同じである。これらの傾向についてはより厳密な「卒業率」(同年度入学者の卒業生数/同年度卒業の入学、編入学生数)を定めた方が、同年度入学者に対する正しい分析ができるものと考えられる。

【B：教育全般の総括に関する設問】

『一般教育』に対して「満足している」と回答したものは全体で 31%であり、平成 25 年度の 23%に比べて 8 ポイント増加している。学科別では、機械工学科が 36%と高く、電気工学科、電子情報工学科および建築学科が 31%前後であり、物質工学科が 23%となっている。機械工学科は平成 25 年度の 32%に比べて 4 ポイント上昇している。物質工学科は平成 25 年度の 32%から 23%へと低下している。逆に建築学科が平成 25 年度の 11%から 30%まで 19 ポイント急増している。建築学科について詳しく見ると、平成 24 年度の 36%、平成 25 年度の 11%そして今年度 32%へと回復している。

また、「おおむね満足している」を含めると全体で 88%となっており、平成 25 年度の 82% (H24 年度 86%) より 6 ポイント上昇している。学科別では、電気工学科が 95%と最も高く、次いで機械工学科、物質工学科そして建築学科がいずれも 87%そして電子情報工学科が 86%であり、5 学科とも高いポイントとなっている。電気工学科は平成 25 年度の 67% (H24 年度 88%) から 28 ポイントも上昇している。物質工学科および建築学科も平成 25 年度の 81% (H24 年度 91%と 92%) から 6 ポイント上昇している。機械工学科は平成 25 年度の 89% (H24 年度 72%) より 2 ポイント低め、電子情報工学科は平成 25 年度の 94% (H24 年度 88%) から 8 ポイント低下している。各学科の 3 年間の増減傾向を見てみると、上昇下降を年度ごとに交互に示している。

専門教育に関しては、「満足している」と回答したものは全体で 39%となっており、平成 25 年度の 31%に比べて 8 ポイント上昇している。学科別で「満足している」を見てみると、機械工学科が 56%と最も高く、ついで、電気工学科と電子情報工学科がいずれも 40%、物質工学科が 37%そして建築学科が 22%と最も低くなっている。物質工学科は平成 25 年度の 19% (H24 年度 16%) から 18 ポイントも上昇しており、年々満足度が向上している。

「満足している」と「おおむね満足している」を含めると全体では 89%となっており、平成 25 年度の 83% (H24 年度 90%) よりも 6 ポイント上昇している。学科別では、電気工学科が 93% (H25 年度 81%, H24 年度 98%) となり最も高く、平成 25 年度よりも 12 ポイントも増加している。次いで機械工学科が 92% (H25 年度 87%, H24 年度 94%)、電子情報工学科が 90% (H25 年度 88%, H24 年度 94%)、物質工学科が 85% (H25 年度 81%, H24 年度 66%) そして建築学科が 84% (H25 年度 81%, H24 年度 98%) であり、4 学科とも平成 25 年度よりも 2~5 ポイント程度上昇している。前述の建築学科は、「満足している」の回答率は低い、「おおむね満足している」と合わせると他学科とあまり遜色ない。過去 3 年間に限って分析すると、機械工学科、電子情報工学科は毎年 90%前後の安定した高ポイントが得られている。電気工学科も 3 年間の平均では 90%ではあるが年度によって増減差大きい。物質工学科は平成 24 年度の 66%が極端に低いとその後、平成 25 年度は 81%そして今年度は 85%となっており、着実に良好な傾向を示している。建築学科は 3 年間の平均では 88%と高いが、電気工学科のように年度による増減差が大きい。これら増減差の原因調査と改善については何らかの対策を講じる必要がある。

教育設備に関しては、「満足している」は全学科平均で 38%であり、平成 25 年度の 26% (H24 年度 33%) に比して 12 ポイント上昇している。「おおむね満足している」までを含めると 84%となっており、こちらも平成 25 年度の 74% (H24 年度 82%) から 10 ポイント増加している。

学科別では、電気工学科が「満足している」と「おおむね満足している」を合わせると、93% (H25 年度

67%、H24年度95%)であり、前年度よりも25ポイントも上昇しており、前々年度95%とほぼ同様であり、高ポイントとなっており、平成25年度だけが極端に低い原因は不明である。電子情報工学科は88% (H25年度94%、H24年度88%)であり、機械工学科は85% (H25年度74%)であり、比較的高水準を示している。物質工学科は81% (H25年度65%、H24年度81%)であり、前年度よりは16ポイント上昇しており、前々年度と全く同じポイントである。平成25年度が極端に低い原因は不明である。建築学科は73%であり、他の学科に比べてやや低いポイントである。

学生生活では「満足している」と回答した学生は全学では52%であり、「おおむね満足している」までを含めると全学で85% (H25年度82%、H24年度86%)となっており、平成25年度よりも若干上昇している。過去3年間はほとんど安定して高ポイントを維持している。学科別で見ると、「満足している」と回答した学生は機械工学科、電子情報工学科、物質工学科が54%~57%の範囲であり、電気工学科と建築学科がそれぞれ48%と50%であり、やや低い。また、「不満である」と回答した学生が全学で12名 (H25年度17名、H24年度3名)となっており、平成25年度よりは5名減少したが平成24年度に比べるとまだ多いと言える。

自分自身に実力がついたと思うかの設問では「身に付いたと思う」と回答したものは、全学で32% (H25年度27%、H24年度31%)となり、平成25年度よりも5ポイント、平成24年度よりも1ポイントそれぞれ増加している。学科別では、機械工学科、電気工学科がいずれも44%であり、機械工学科は平成25年度よりも10ポイント以上、電気工学科は27ポイント (H25年度17%)も上昇している。電子情報工学科は27%であり、平成25年度よりも4ポイント程度減少している。物質工学科は19%であり、

建築学科は21%であり、平成25年度の31%に比べて10ポイント減少しており、平成24年度の50%と比べると30ポイント近く大幅に低下している。

「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」までの回答を含めると、全学で74%であり、平成25年度の69% (H24年度82%)に比して5ポイント上昇している。学科別では、機械工学科が85%であり、平成25年度の68% (H24年度66%)に比して17ポイントも急増している。平成25年度最高ポイント82% (H24年度88%)を示した電子情報工学科は76%であり6ポイント減少しており、ここ3年間では毎年6ポイントずつ低下しているので原因究明と対策が必要かと思われる。電気工学科は71% (H25年度64%、H24年度83%)であり、25年度よりも7ポイント上昇している。物質工学科は68%であり、平成25年度の60% (H24年度75%)より8ポイント増加している。建築学科は70%であり、平成25年度の72% (H24年度95%)よりやや低下している。

【C：科目教育に関する設問】

○ 機械工学科

平成26年度のアンケートでは、『必要性』の項目では、「必要」あるいは「おおむね必要」と回答した割合が総合系科目の75%を除いて、全て88%~95%の範囲 (H25年度は制御系科目：84%を除き、90%~92%)を占めるかなり高いポイントが得られた。

『教育実状』の項目においては、「適性」あるいは「おおむね適性」と回答した割合も一部の系科目 (加工系：85%、総合系科目：78%)を除いて90%前後~98%の範囲 (H25年度は80%~92%)となり、高いポイントとなった。

一方、『達成度』に関しても「身に付いた」あるいは「おおむね身に付いた」と回答した割合が、80%~90% (H25年度は71%~82%)の範囲となり、前年度よりも10ポイント弱上昇しており、平成24年度の78%~92%とほぼ同じレベルと言える。今後、高い『達成度』を維持するためには教職員側の工夫・改善および学生側の学習に対する態度、姿勢、意欲の高揚等が必要であると推察されるとともに、複数年におよぶ推移・傾向を把握することも重要と思われる。

- 工学基礎系 [工学基礎Ⅲ, 工業力学, 工業英語など]

	今回	前回	前々回
必要性	90	90	81
教育実状	93	90	67
達成度	80	71	78

- 構造系 [材料学, 材料力学, 機械振動学, 機構と要素, 機械要素設計, 基礎塑性力学など]

	今回	前回	前々回
必要性	93	92	88
教育実状	90	84	91
達成度	85	82	91

- 加工系 [溶融加工, 精密加工]

	今回	前回	前々回
必要性	88	92	81
教育実状	85	90	97
達成度	80	71	84

- エネルギー系 [熱力学, 伝熱工学, 水力学, 流体工学, 流体機械, 熱機関工学など]

	今回	前回	前々回
必要性	95	90	91
教育実状	98	92	97
達成度	85	82	92

- 制御系 [コンピュータ工学, 数値計算法, 電気電子, 計測制御, マイクロ基礎・応用, システム制御など]

	今回	前回	前々回
必要性	95	84	94
教育実状	93	80	88
達成度	90	76	88

- 総合系 [機械基礎製図, 創造設計演習, 機械基礎実習, 機械創造実習, 機械工学実験, 生産システム工学など]

	今回	前回	前々回
必要性	75	90	91
教育実状	78	87	91
達成度	85	79	88

- 機械工学科専門科目計

	今回	前回	前々回
必要性	89	90	88
教育実状	89	87	91
達成度	84	77	85

アンケートにおける、「必要（適性，身に付いた）」あるいは「おおむね必要（おおむね適性，おおむね身に付いた）」と回答した割合は下記のとおりである。なお，参考までに（ ）内に平成25年度の割合も併記している。

- 工学基礎系科目 [工学基礎Ⅲ，工業力学，工業英語など]
【必要性：90% (90%)，教育実状：93% (90%)，到達度：80% (71%)】
- 構造系科目 [材料学，材料力学，機械振動学，機構と要素，機械要素設計，基礎塑性力学など]
【必要性：93% (92%)，教育実状：90% (84%)，到達度：85% (82%)】
- 加工系科目 [溶融加工，精密加工など]
【必要性：88% (92%)，教育実状：85% (90%)，到達度：80% (71%)】
- エネルギー系科目 [熱力学，伝熱工学，水力学，流体力学，流体機械，熱機関工学など]
【必要性：95% (90%)，教育実状：98% (92%)，到達度：85% (82%)】
- 制御系科目 [コンピュータ工学，数値計算法，電気電子工学，計測制御，メカトロニクス基礎，メカトロニクス応用，システム制御工学など]
【必要性：95% (84%)，教育実状：93% (80%)，到達度：90% (76%)】
- 総合系科目 [機械基礎製図，創造設計演習，機械基礎実習，機械創造実習，機械工学実験，生産システム工学など]
【必要性：75% (90%)，教育実状：78% (87%)，到達度：85% (79%)】
- 機械工学科専門科目計
【必要性：89% (90%)，教育実状：89% (87%)，到達度：84% (77%)】

○ 電気工学科

各科目の『必要性』に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合，『教育実状』に関して、「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合，『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は，以下のとおりであった。

○電気電子基礎

	今回	前回
必要性	95%	92%
教育実状	95%	92%
達成度	88%	89%

○情報工学系

	今回	前回
必要性	85%	89%
教育実状	83%	86%
達成度	71%	81%

○電力工学系

	今回	前回
必要性	98%	92%
教育実状	93%	86%
達成度	83%	83%

○電子工学系

	今回	前回
必要性	93%	92%
教育実状	95%	89%
達成度	90%	89%

○電気電子共通

	今回	前回
必要性	95%	92%
教育実状	93%	86%
達成度	93%	83%

○電気工学科専門科目計

	今回	前回
必要性	93%	91%
教育実状	92%	88%
達成度	85%	85%

電気工学基礎：電気基礎，工学基礎Ⅱ，電気磁気学，電気回路，電気電子計測など。

情報工学系：情報処理，計算機工学，計算機工学特論など。

電力工学系：電気機器，電気設計，電力輸送工学，電力発生工学，高電圧工学，パワーエレクトロニクス，電気材料，電気法規など。

電子工学系：電子デバイス，電子回路，電子物性，電子設計，論理回路，通信工学，電子工学特論など。

電気電子共通：電気電子工学演習，電気製図，制御工学，システム制御，機械工学概論，電気電子工学実験など。

上記の結果について，特徴的なことを以下に記す。

〔必要性〕，〔教育実状〕に関しては，80%以上となっており，教育システムとして大きな問題はないものと思われる。〔達成度〕については，情報工学系において，71%と前年度から減少している。24年度，25年度と80%以上であったことから，今後の推移を見守る必要がある。

○ 電子情報工学科

各科目の『必要性』に関して，「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合，『教育実情』に関して，「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合，『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は，以下のとおりであった。

電子情報基礎

	今回	前回
必要性	100%	100%
教育実状	98%	97%
達成度	100%	94%

電子工学系

	今回	前回
必要性	98%	88%
教育実状	93%	91%
達成度	86%	79%

情報工学系

	今回	前回
必要性	98%	97%
教育実状	100%	97%
達成度	95%	91%

総合領域

	今回	前回
必要性	86%	97%
教育実状	86%	88%
達成度	79%	85%

情報工学系の演習

	今回	前回
必要性	95%	100%
教育実状	86%	100%
達成度	98%	100%

電子工学系の実験

	今回	前回
必要性	95%	91%
教育実状	91%	82%
達成度	86%	85%

電子情報工学専門科目計

	今回	前回
必要性	95%	95%
教育実状	92%	92%
達成度	91%	89%

電子情報基礎：工学基礎II，電子工学基礎，プログラミング，論理回路など

電子工学系：電気回路，電子回路，電磁気学，半導体工学，電気電子計測など

情報工学系：アルゴリズム，情報理論，数値計算法，言語処理系，情報ネットワーク，ソフトウェア工学など

総合領域：計算機工学，通信工学，情報処理システム，制御工学など

情報工学系の演習：情報工学演習，電子情報工学演習など

電子工学系の実験：電子工学実験

電子情報工学科専門科目計

上記の結果について，特徴的なことを以下に記す。

『必要性』については，総合領域のみ90%を下回っている。『教育実状』については，情報工学系の演習で14%減となっており，一方，電子工学系の実験で9%増となっている。『達成度』に関しては『必要性』と同様に総合領域が下がっている。全体的に例年通りの状況であるが，総合領域の今後の推移に注視する必要がある。『達成度』に関して『必要度』との乖離が近年縮まってきているため，今後も継続的な分析を行うことが望ましい。

○ 物質工学科

すべての科目において80%以上の学生が必要性を感じ，教育実状にも満足していた。科目別にみると，基礎的な化学に対してはすべての学生は必要と回答しており，90%以上が適正と感じ，身に付いたと回答している。基礎的な生物に関しては90%以上が必要性を感じているが，満足度や達成度は75%程度であった。しかし，平成25年度に比べると20%以上上昇して入り，改善がみられる。専門展開科目，実験，コース別科目に関しても必要性，満足度，達成度ともに80%以上であったが，基礎的な工学基礎の達成度のみ77%であっ

た。全体を通じて平成25年度低かった項目は改善が見られ、特に、昨年度低かった生物系は非常に良くなっているようである。このため現在の科目設定に関しては非常に良好であると思われる。

基礎的な化学

	今回	前回
必要性	100%	97%
教育実状	97%	95%
達成度	90%	84%

基礎的な生物

	今回	前回
必要性	94%	81%
教育実状	77%	51%
達成度	74%	54%

基礎的な工学基礎

	今回	前回
必要性	84%	86%
教育実状	88%	84%
達成度	77%	54%

専門展開科目

	今回	前回
必要性	94%	86%
教育実状	97%	89%
達成度	84%	76%

物質コース専門科目

	今回	前回
必要性	91%	76%
教育実状	95%	76%
達成度	87%	63%

生物コース専門科目

	今回	前回
必要性	100%	79%
教育実状	88%	53%
達成度	82%	43%

実験

	今回	前回
必要性	100%	92%
教育実状	94%	95%
達成度	90%	91%

物質工学科専門科目計

	今回	前回
必要性	94%	96%
教育実状	91%	80%
達成度	84%	67%

基礎的な化学：(共通科目)工学基礎Ⅱ，分析化学，無機化学，有機化学，物理化学，化学工学など

基礎的な生物：(共通科目)(生物化学，生物工学基礎など)

基礎的な工学基礎(共通科目)情報処理，工業英語，電気工学基礎，機械工学基礎，品質管理など

専門展開科目：(共通選択科目)環境工学，高分子化学，分析化学特論，食品工学，生物資源工学など

物質コース専門科目：機能材料工学Ⅰ，Ⅱ，プロセス工学，反応工学，物質工学演習など

生物コース専門科目：生体触媒工学，生物工学，微生物工学，生体高分子工学，生物演習など

実験：共通実験，コース別実験など

○ 建築学科

各科目の『必要性』に関して、「必要と思う」と「おおむね必要と思う」を選んだ回答数の割合、『教育実状』に関して、「適正だったと思う」と「おおむね適正だったと思う」を選んだ回答数の割合、『達成度』に関して「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」を選んだ回答数の割合は、以下のとおりであった。

建築学基礎

	今回	前回
必要性	94%	86%
教育実状	82%	69%
達成度	79%	78%

計画系1

	今回	前回
必要性	94%	94%
教育実状	82%	83%
達成度	85%	86%

計画系2

	今回	前回
必要性	94%	83%
教育実状	94%	83%
達成度	91%	86%

環境系

	今回	前回
必要性	97%	92%
教育実状	85%	72%
達成度	79%	69%

構造系1

	今回	前回
必要性	97%	92%
教育実状	85%	89%
達成度	79%	83%

構造系2

	今回	前回
必要性	91%	94%
教育実状	94%	94%
達成度	73%	89%

生産系

	今回	前回
必要性	91%	97%
教育実状	79%	86%
達成度	70%	92%

実験

	今回	前回
必要性	91%	100%
教育実状	88%	94%
達成度	88%	92%

建築設計演習

	今回	前回
必要性	91%	86%
教育実状	82%	83%
達成度	79%	75%

建築学科専門科目計

	今回	前回
必要性	94%	92%
教育実状	86%	85%
達成度	80%	81%

建築学基礎: 造形, 工学基礎Ⅱ, コンピュータ・リテラシ演習など

計画系1: 建築デザイン, 建築デザイン演習, 日本建築史, 西洋建築史, 近代建築史など

計画系2: 住環境計画, 都市計画, 都市設計, 建築計画, 建築設計論など

環境系: 建築環境工学, 建築設備, 建築設備演習など

構造系1: 構造力学, 材料力学, 構造力学特論, 建築塑性解析, 建築振動学など

構造系2: 鋼構造, 鉄筋コンクリート構造, 基礎構造, 構造計画, 構造設計演習など

生産系: 建築構法, 建築材料, 建築法規, 建築測量, 建築生産など

実験: 建築材料実験, 建築実験実習など

建築設計演習: 建築設計演習, 卒業設計など

図 建築系の専門科目についての評価

上記の結果について、特徴的なことを以下に記す。

『必要性』については、すべての項目で90%以上の値を得た。『教育実状』については、生産系科目で、若干の落ち込みが見られる。『達成度』も、『教育実状』同様、生産系科目で、若干の落ち込みが見られる。『必要性』は高く認められているゆえ、生産系科目について、今後の結果を注視する必要がある。一方、前回60%台であった環境系科目の『達成度』は、今回10ポイント増の79%であった。

【D：学習・教育到達目標に関する設問】

『教育の実状』では、「適正だった」と「おおむね適正だった」をあわせて肯定的回答として捉える。『達成度』については、「身に付いた」と「おおむね身に付いた」をあわせて肯定的回答として捉える。

平成26年度と平成25年度の結果を見比べる限り、本設問での結果は、全体的に改善されている。

学習・教育到達目標別に、回答結果を見る。前回は、全体の18項目中、8項目で肯定的回答が80%を割り込んだ。中でも、C-1『達成度』は、60%台であった。しかし、今回は、全体的に持ち直しが見られ、すべての項目で80%以上となった。細かく見ると、『教育の実情』では、B-1, B-2, B-3, B-4, ならびにC-2が90%以上と高い。『達成度』では、B-1, B-2, ならびにB-3の結果が80%台後半であり、その他の項目は80%台前半であった。

学科別の回答結果を見る。平成25年度は、肯定的回答の割合が60%台という結果にとどまる項目が多かった。A-1『達成度』機械工学科(64.1%)、A-2『達成度』物質工学科(62.2%)、A-3『達成度』物質工学科(64.9%)、ならびにC-1『達成度』電子情報工学科(60.6%)と物質工学科(62.2%)である。しかし、平成

26年度は、すべての学科、すべての項目で、70%台の支持を得ることができた。

【E：その他に関する設問】

○ TOEIC関係の英語教育

過去5回の調査ではすべて、「役に立った」および「それなりに役に立った」が60%台であった。中でも、平成25年度の建築学科は、過半数を下回り、44%であった。しかし、平成26年度の調査では、学科別に見ると、機械工学科は60%であったが、全体では71%となった。今後、こうした評価が継続されることを期待したい。

○ 2年次の混合学級制度

この設問で、「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ回答は非常に多く、これらの割合は全体の91%を占めた。学科別に見ても、大きな違いはなく、全体的に高評価であった。

○ 授業外単位制度

この設問で、「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ回答は非常に多く、これらの割合は全体の96%を占めた。学科別に見ても、大きな違いはなく、すべての学科から90%以上の支持が得られた。

○ 追認制度

この設問で、「よい制度」と「それなりによい制度」を選ぶ回答は多く、これらの割合は全体の88%を占めた。平成25年度は、電気工学科が72%であったが、平成26年度のその値は90%であった。なお、最も評価が低いのは電子情報工学科であるが、それでも84%の支持を得ている。

○ 1～3学年次のLHR

LHRをいかに意義深いものにするか。これまでの調査では、継続して課題として挙げられてきたことである。しかし、平成26年度は、「有意義だった」および「おおむね有意義だった」を選ぶ回答が増え、全体で72%であった。今後、こうした評価が継続されることを期待したい。なお、学科別に見ると、機械工学科と物質工学科が70%台を割り込んだ。

○ 教育行事

「有意義だった」と「おおむね有意義だった」を選ぶ回答の割合は、建築学科では73%にとどまったが、他の学科はすべて80%台であり、全体でも87%の支持を得た。

○ 特別活動2

「有意義だった」と「おおむね有意義だった」を選ぶ回答の割合は、建築学科で80%を若干割り込んだが、他の学科はすべて80%台であり、全体でも87%の支持を得た。

○ シラバスの利用

「利用しなかった」と答える学生は、平成25年度に比べて7ポイント少なくなり、全体の12%であった。学科別に見ても、その数に大きな違いはない。こうした結果が、平成26年度だけに終わらないことを期待したい。

○ レポート等のフィードバックはどうだったか

「適正」と「おおむね適正」との回答が、平成25年度に比べて11ポイント増え、全体で79%となった。この値は、過去6回と見比べても最も高い。こうした結果が、平成26年度だけに終わらないことを期待したい。

○ 授業時間外の学習指導体制（補習・オフィスタイム制度）の制度の実状

『必要性』について、「必要」と「それなりに必要」を選ぶ回答は、予想するほど高くなく、合計で全体の

76%であった。前回比では、8ポイント増である。

『実状』については、「機能していた」と「それなりに機能していた」を選ぶ回答の割合が、合計で全体の71%であった。前回比では、13ポイント増である。過去6回はすべて50～60%台であったことより、平成26年度の結果には改善の兆しが見える。こうした結果が、今回だけに終わらないことを期待したい。

○ 授業改善アンケートの反映

「よく反映されている」と「おおむね反映されている」を選ぶ回答の割合は、合計で全体の69%であった。値としては、高いとは言えないが、前回比で16ポイント増である。学科別に見ると、前回評価が低かったのは建築学科であり、その値は39%であったが、今回は、76%と大きく持ち直す結果となった。こうした結果が、今回だけに終わらないことを期待したい。なお、建築学科とは逆に評価の落ち込みが見られたのは、電子情報工学科であった(56%)。

○ 学修単位制で科目の中で、授業15時間、自学自習30時間を適用した科目

「意識した」と「ある程度意識した」との回答は、前年度比で22ポイント増加し、全学科で63%であった。平成25年度、電子情報工学科、物質工学科、ならびに建築学科での評価が低かったことを指摘したが、平成26年度も、電子情報工学科と物質工学科で50%を割り込む結果となった。引き続き、学生に対して学修単位制の理解を促すことが必要である。

○ 学校の事務サービス

平成25年度は、「よかった」と「おおむねよかった」の回答が、全体で70%だったが、今回は82%に回復した。相対的に見ると、機械工学科での評価が高くなく、70%であった。

○ 進路支援

「よかった」と「おおむねよかった」の回答が、すべての学科で80%を超え、全体で86%だった。一方、「あまりよくなかった」と「よくなかった」の回答が、機械工学科(16%)と建築学科(18%)だった。

○ 課外活動

「よかった」と「おおむねよかった」の回答が、平成25年度に引き続き、すべての学科で80%を超え、全体で81%だった。

○ 学生相談室での対応

学生相談室の利用経験者は、全体の59%だった。この値は、平成25年度に比べると24ポイント高い。また、利用したことのない学生の回答を除き、利用経験者の回答に限ってみると、「よかった」と「おおむねよかった」の回答は、平成25年度とほぼ同じ77%であった。

○ 寮の運営・指導

「よかった」と「おおむねよかった」の回答は、GROSS(「入寮経験なし」を含む)で見ると45%で、NET(「入寮経験なし」を除く)で見ると74%だった。

【自由意見】

平成25年度より35件少ない、72件(M科22件、E科12件、I科12件、C科14件、A科12件)の意見が寄せられた。内容別分類によれば、「授業外単位」が18件(平成25年度は「単位認定」として9件)、「追認」が16件(平成25年度と同じ)、「寮」が18件(平成25年度24件)、「アイデア」が14件(平成25年度は「意見・要望」として19件)、ならびに「その他」が6件(平成25年度23件)であった。

関係部署等においては、内容を精査し、必要に応じて検討・改善を頂ければ幸いである。

2.2 専攻科修了時アンケート

これまでに実施した専攻科修了時アンケートの実施時期、回答者数等は表2-2-1に示す通りである。今回は、平成26年度専攻科修了予定者(アンケート実施時)に対して実施したアンケートの分析結果である。

表2-2-1 専攻科修了時アンケート実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成14(2002)年度修了生	2003年1月	23	23	100
平成15(2003)年度修了生	2004年1月	18	17	94
平成16(2004)年度修了生	2005年2月	19	19	100
平成17(2005)年度修了生	2006年1月	27	27	100
平成18(2006)年度修了生	2007年2月	24	24	100
平成19(2007)年度修了生	2008年1月	23	23	100
平成20(2008)年度修了生	2009年2月	35	33	100
平成21(2009)年度修了生	2010年2月	36	35	97
平成22(2010)年度修了生	2011年2月	30	25	83
平成23(2011)年度修了生	2012年2月	26	26	100
平成24(2012)年度修了生	2013年1月	30	30	100
平成25(2013)年度修了生	2014年1月	32	32	100
平成26(2014)年度修了生	2015年1月	19	18	95

アンケート対象者は例年20~30名程度であり、各専攻や系での回答数は少数であることに留意していただきたい。また以降、「生産情報システム工学専攻機械系」については単に「機械系」と表記する。「電気系」および「電子情報系」についても同様に表記する。

【A：回答者自身に関する質問】

平成26年度修了予定者19名のうち、回答者18名の内訳は、機械系2名、電気系8名、電子情報系2名、応用物質工学専攻4名、建築学専攻2名であり、その進路は進学11名(61%)、就職7名(39%)である。進学率は平成24年度の43%、平成25年度の38%から大幅に増加した。特に、機械系において29%から100%へ増加したことが大きな要因である(学生数は2名のみではあるが)。また、電気系および電子情報系においては、これまでの傾向と同様に高い進学率となっている。

【B：教育全般の総括に関する設問】

一般教育については「満足している」または「おおむね満足している」の回答が前年度の75%から89%へ上昇しているのに対し、専門教育では、前年度75%から56%へ低下している。また、教育・研究環境については、「満足している」または「おおむね満足している」の回答が81%から94%へ上昇している。平成23年度では、60%であったことを踏まえると、教育・研究環境に関しては年々充実しており、専門教育の満足度の低下の要因としては考えにくい。さらに、実力がついたかという設問に対しては、「満足している」または「おおむね満足している」の回答が59%から72%へ上昇していることも踏まえると、設備面や実力向上といった点では満足していると思われるので、専門教育の満足度の低下の要因はこれら以外の面にあるものと推察される。

【C：科目教育に関する設問】

地域協働関連科目以外において、「必要性」、「教育実状」、「達成度」のいずれにおいてもおおむね80%以上が肯定的な回答であり、良好な状況であることがわかる。特に、一般科目においては、「教育実状」が平成25年度の69%から89%に、「達成度」が63%から78%に上昇している。このことは、【B：教育全般の総括】でみられた一般科目の満足度の向上にも関連していると思われる。

地域協働関連科目に関しては、「必要性」は80%であったが、「教育実状」、「達成度」とも6%と低い結果であった。前述したように、他の科目はおおむね80%以上が肯定的な回答であったことから、科目に関して

今後検討する必要があるものと思われる。

【D：学習・教育目標に関する設問】

『適正度』は多くの項目でおおむね80%以上であり、「多面的考察力」、「工学の専門知識」、「実践力」、工学の学際的知識」、「課題探究力」に関する科目に関してはすべての学生が適正であると回答している。しかし、「コミュニケーション能力」の項目では78%と80%を下回る結果となった。

『到達度』に関しても多くの項目でおおむね身についたと回答しており、「高い倫理観」、「工学の専門知識」に関する科目ではすべての学生が身についたと回答している。しかし、「コミュニケーション能力」が67%、「課題解決力」が72%と80%を下回った。

適正度と到達度の両方から見ると、多くの科目で学生は満足しており、また、身についたと感じているようであるが、「コミュニケーション能力」に関して学生は教育の実状にやや不満があり、また到達度も低いようである。「コミュニケーション能力」はJABEE審査においても指摘された項目であるため、関連科目の見直し、学生へのサポートなど現状を見直し、改善する必要がある。

【E：その他の設問】

開講されている選択科目に対する満足度に関しては、おおむね70%は上回っているが、すべてで80%を下回った。中でも「工学基礎科目」は67%と学生の満足度が低かった。このため、今年度修了生は選択科目の設定に関してやや不満を持っているようである。

専攻科における少人数の授業形態および教員の授業時間外の対応に関してはほぼ90%以上がおおむね満足しているようであった。TOEICに関する学習の支援体制では満足、おおむね満足と答えた学生は56%であり、約半分の学生は不満を抱えており、これは以前から不満を感じる学生が多い項目であるため、早急な改善（対策）が必要であると思われる。シラバスの活用に関しては70%の学生が活用しているが、今後シラバスの書式が変更されるため、学生が利用しやすい変更が期待される。

学会発表、特別研究発表会など研究等の発表に関しては80%以上がおおむね満足しており、学生はプレゼンを必要と感じ、実際に体験することが学習・研究の意欲の向上に影響していると思われる。一方でポスターセッションに関しては60%が企画として良いと感じているが、40%は必要ないと感じている。ポスターセッションを経験したことに関しては67%が満足しており、ポスターセッションを必要と感じている学生にとっては満足しているようである。この背景には開催時期や開催方法等にも関連があるため、今後の何らかの検討が必要である。

その他の学生サービスに関しては、80%以上がおおむね満足していた。中でも相談室に関しては利用した学生は全体の40%であったが、満足度は100%であった。TAに関しては80%が経験しており、経験した学生のすべてが有益であったと回答している。

【自由意見】

- ・ 電気系の専門授業が少ないと感じる。
- ・ 他の専門科目をもう少し改善してほしい。現状では理解できずに終わってしまう感じがする。

2.3 新入生保護者アンケート

現在までに実施した新入生保護者アンケートの実施時期および回答者数等は表2-3-1の通りである。今回の分析は、平成27年度における新入生保護者実施分を対象とし、前年度（H26）実施分と比較する形で行った。そのため、文章中の括弧（ ）内の数値は、特に断らない限り、前年度（H26）の数値を示す。

表2-3-1 新入生保護者アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（%）
平成18（2006）年度	平成18年4月	215	202	93.9
平成19（2007）年度	平成19年4月	209	208	99.5
平成20（2008）年度	平成20年3月	210	210	100
平成21（2009）年度	平成21年3月	205	205	100
平成22（2010）年度	平成22年3月	215	207	96.2
平成23（2011）年度	平成23年3月	212	203	95.7
平成24（2012）年度	平成24年3月	209	137	65.5
平成25（2013）年度	平成25年3月	209	186	88.9
平成26（2014）年度	平成26年3月	205	194	94.6
平成27（2015）年度	平成27年3月	207	73	35.3

* 平成27年度の1年次在籍者数は215名だが、前年度からの留年者数8名を除いた207名を「新入生」とみなし、本アンケートの対象としている。

【回答数および回答率】

回答者は全体で73（194）名であり、新入生全体207（205）名*の35.3（94.6）%にあたる。表2-3-1から明らかなように、今回の回答率が、調査開始以来、最も低い結果となった。なぜ、今回これほど回答率が低下したのか不明である。

前号までも述べたが、平成24年度の回答率の低下については、回答方法を3種類（web入力、マークシート、A4紙媒体）に変更し混乱を招いたことが要因であった。平成25年度にQRコードを用いた「web入力」に回答方法を一本化し、平成26年度は94.6%まで回復してきていた。

保護者の多くが携帯電話からスマートフォンへ移行していると思われる。携帯電話の場合、多くはインストール済みであったQRコードを読み取るための専用「アプリ」が、スマートフォンの場合、各自でダウンロードすることになっているため、「アプリの有無」が考えられる。また、アプリがインストール済みである場合もあるというが、その際にはどのアプリを使用すればよいのか、わからない場合もあるという。おそらく、「QRコード」を用いていることに主因があるように思われる。

また、アンケート実施の「依頼文書」には、QRコードとあわせてURLも記載しているが、その場合でも、結果的に保護者自身が「手入力」しなければアクセスできないようになっていることも、影響しているかもしれない。

さらに、調査依頼の文書は、従来通り合格通知関係書類と同封し郵送しているが、さまざまな書類と同封していることで、逆に「必須」ではなく「任意」のアンケートと「誤解」されているかもしれない。

いずれにせよ、直接保護者に尋ねてみる以外、要因を明らかにすることは困難であるとしても、次年度以降の回答方法をどうするか、早急な検討が必要である。また、今回のように極めて回答率の低いアンケート結果をどのように分析するか、あわせて検討する必要がある。

【通学生・寮生の別】

通学生の割合が58.9%（62.9%）で寮生の割合が38.4%（37.1%）との回答を得た。全体的には、通学生と寮生の割合がおおよそ6：4という傾向に大きな変化は見られない。なお、「間借り・下宿などからの通学生」が2名あった。

学科別では、物質工学科57.9%（23.7%）、電気工学科40.0%（33.3%）で寮生の割合が高かった（但し、学科別の割合は年度毎の変動が大きい）。

【通学生の通学方法】

この設問は、通学生の保護者のみへの設問である。また「すべて」の通学手段を問うため、複数回答が可能である。

「公共交通機関」83.7% (56.3%)、「自転車」14.0% (25.8%) が上位を占めたのは前回同様である。但し、公共交通機関の割合が大きく増加した点が今回の特徴である。

【寮生活】

この設問は、寮生の保護者のみへの設問である。「やや心配」42.9% (57.7%) が減少し、「心配がある」25.0% (16.9%) が増加した。特に、「心配がある」との回答は平成21年以降、最も大きい割合となった。

なお、この設問では「心配がある」と回答した保護者に「寮生活について最も心配なことは」何かを4つの選択肢（「学業」、「寮生活」、「人間関係」、「その他」）の中からさらに回答するようになっている。

「人間関係」32.1% (56.1%)、「寮生活」28.6% (35.1%) が上位を占める傾向に大きな変化は見られない。「心配がある」との回答が増えているものの、前回と比べ「人間関係」、「寮生活」とも比率は下がっているのが特徴である（但し、ここでは4つの選択肢の回答率が100%になっていないので注意が必要である）。

【有明高専を最初に知ったのは】

「以前から知っていた」60.3% (58.2%) が最も多く、「お子様から」12.3% (7.2%)、「知人（身内、親戚等）」8.2% (17.5%) が続く。「お子様から」が「知人（身内、親戚等）」を初めて上回った点が大きな特徴である。

また、「中学校の先生」5.5% (1.5%) が増加し、「ホームページ」1.4% (3.1%) がわずかながら減少している。「ポスター・パンフレット等」や「中学校での学校説明会」はほとんど変化が見られない。

【有明高専受験を決定した時期】

「昨年10月頃」31.5% (20.6%) の回答が最も多く、「中学3年生の1学期」24.7% (34.5%) と続く。前回と比べ、1位と2位が逆転した結果となった。

【進路決定の際、有明高専の情報を何で得ましたか】

「ホームページ」26.4% (25.8%) が最も多く、「オープンカレッジ」20.9% (20.9%) と上位を争っている状況に変化は見られない。「お子様から」が大きく増加した点が特徴である。前述の設問（「有明高専を最初に知ったのは」）で「お子様から」の割合が増加したと関連しているといえるだろう。

また、「ポスター・パンフレット等」が年々減少傾向であることも（残念ながら）変わらなかった。広報活動における戦略の見直しを期待したい。

【有明高専入学の決め手】

「お子様本人の希望」34.2% (33.2%) が最も多く、「就職率が高い」24.3% (24.2%)、「大学へ編入学できる」13.4% (14.6%) と続く。全体としての傾向に大きな変化は見られない。

【入学後心配なこと】

「学業」41.9% (43.1%) が最も多く、「学校生活」24.8% (22.6%) と続く。ここでもほぼ例年同様の結果が得られている。

【アドミッションポリシーを意識しましたか】

全体的に「意識した」と「意識しなかった」の割合が7：3という傾向に大きな変化は見られない。アドミッションポリシーに対する意識を向上させるには、何か新しい工夫（しかけ）が必要である。

【自由意見】

合計8件（17件）の自由意見を寄せて頂いた。「学生生活（寮生活を含む）」や「学習面」でのに対する不安の声や、説明会（3校合同説明会・入学説明会）で期待が持てたといった内容であった。中には「夏休みの始まりを普通高校と同じにしてほしい」といった内容もあった。

自由意見の件数が減少傾向にある。多様な意見を一つでも多く汲み取るための工夫が必要であると同時に、学内へのフィードバックも、時機を逸することのないよう（自戒もこめて）留意すべきである。

2.4 4年次編入生アンケート

現在までに実施した4年次編入生アンケートの実施時期および回答者数等は表2-4-1の通りである。今回は、平成27年度4年次編入生に対して実施したアンケートの分析である。

表2-4-1

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成19年度	平成19年4月	11	11	100
平成20年度	平成20年4月	11	10	91
平成21年度	平成21年4月	7	7	100
平成22年度	平成22年4月	9	9	100
平成23年度	平成23年4月	12	12	100
平成24年度	平成24年5月	12	12	100
平成25年度	平成25年5月	13	13	100
平成26年度	平成26年5月	8	8	100
平成27年度	平成27年5月	11	11	100

【所属学科】

機械4名、電気1名、情報5名、物質0名、建築1名の合計11名。

【通学生・寮生の区別、通学方法、寮生活について】

11名の内、通学生6名、寮生5名である。通学生の通学方法は「公共交通機関」＋「徒歩」が8名、「自転車」が2名、「バイク」が2名となっている。寮生5名全員が、寮生活について「心配ない」「おおむね心配ない」と回答している。

【有明高専の認知と情報取得方法】

有明高専を「以前から知っていた」という回答が3名、「高校の先生から」および「知人から」が5名および2名となっている。「ホームページ」「ポスター・パンフレット」と回答した学生が無く、昨年の分析結果とほぼ同様で、紙媒体での広報や学校説明会の有効性を検討する必要がある（電子媒体に関しては、後に述べる進路決定の際には効果が見られるが、最初に認知してもらうためには伝聞が有効であることなどターゲットの絞り込みが必要）。本年度は「高校における学校説明会」と回答した学生が1名いるため効果の検証を追って行うことが望ましい。

進路決定の際の情報取得方法（複数回答可）に関しては「ホームページ」および「ポスター・パンフレット等」からが各6名、「知人」からが3名、「高校の先生」からが8名と多数を占めている。高校の先生からの進路指導もさることながら、ホームページでの情報取得も積極的になされている。本年度は「オープンカレッジ」と回答した学生が1名いるため効果の検証を追って行うことが望ましい。

【受験決定時期と入学の決め手】

平成26年度は、「2年2学期頃」が一番多かったが、本年度は「2年3学期頃」が5名、次いで「昨年4月頃」が3名、「締切直前」が1名、「昨年5月ごろ」が1名、「それ以前」が1名とつづく。

入学の決め手（複数回答可）は「就職率が高い」が一番多く8名、「大学に編入できる」が7名、と多く、就職・進学への意識の高さがうかがえる。

その他、「専攻科へ進学できる」が3名、「学生教育がしっかりしている」が3名、「経済性」が4名、「寮がある」が1名、「高校・塾の先生の進路指導」が2名、「立地・環境」が1名、「設備」が2名となっており、将来の就職・進学に対する期待感の付与に加えて専攻科などのPRが必要である。

【入学後の心配】（複数回答可）

「学業」が11名、「学校生活」が3名となっており、全ての学生が学業に対する心配があると答えているため、一層のサポートが必要である。「心配なし」という回答した学生が昨年は2名であったが、本年度は0名という点も気になる点であり、本結果の担任等へのフィードバックも検討する必要がある。

【アドミッションポリシーに対する意識】

アドミッションポリシーを「意識した」が8名、「意識しなかった」が3名となっており、昨年は意識しなかったと答えた学生が0名であったことと比較すると、より一層のアドミッションポリシーの周知徹底が必要であると考えられる。

【高専卒業後の進路について】

「就職」が4名、「専攻科進学」が1名、「大学編入学」が5名、「考えていない」が1名となっている。考えていないが1名となっているが、概ね入学時に進路に関して考えている学生が多い。専攻科進学が少ないことが気になるが、高校の先生へのPRを含めて今後検討する必要がある。

また、入学の決め手では進学・編入の希望が多かったものの卒業後の進路となると進学に肯定的な回答が減少していることも検討事項である。

【有明高専への要望、自由意見】

- ・ 授業についていけるか。人間関係が面倒に感じる。
- ・ 数学の課外日数を増やしてほしい。
- ・ 寮に入ってから、いきなり鍵を渡されて、どこで何をしたいのかわからず困った。一年生と一緒に編入生も指導を受けたい。編入生が入った時点で自己紹介をしてほしい。誰が、先輩なのかわからなかった。

少なからず新しい環境に不安を抱えている学生がいる。氷山の一角の可能性もあるため学内へのフィードバックを強化することが重要である。

2.5 OB・OGアンケート

現在までに実施したOB・OGアンケートの実施時期および回答者数は表2-5-1のとおりである。このアンケートは、2年ごとに実施しており、今回は、平成27年度に実施したアンケートの分析である。

表2-5-1 OB・OGアンケートの実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名)	回答率(%)
平成15年度	平成15年7月	500	140	28
平成16年度	平成16年6月・9月	817	130	16
平成17年度	平成17年12月	486	73	15
平成19年度	平成19年12月	512	84	16
平成21年度	平成21年8月	629	97	15
平成23年度	平成23年9月	322	37	11
平成25年度	平成25年9月	332	44	13
平成27年度	平成27年9月	335	66	20

学習・教育目標については、前回同様、不要な項目を指摘する回答は少ない。強いて挙げれば、前回は指摘のなかった「学際的知識」を不要とする回答が、2名から挙げられた。

また、取り入れることが望ましい事項を指摘する回答は、前回は少し下回る22%であり、「現場ですぐに役立つ専門技術」、「伝えたいことを伝えることができるプレゼンテーション・コミュニケーション力」などが、その具体的事項として挙げられた。

一方、学習・科目の評価を見てみよう。

一般教育科目について肯定的評価（「身についた」もしくは「おおむね身についた」）の割合を見てみると、文系科目の値は前回は少し上回る40%であり、理系科目は前回は6ポイント下回る60%であった。

専門科目についても、前回同様、肯定的評価が多い。座学系科目は、前回より6ポイント低い60%が、実技系科目はそれを上回る87%が、肯定的評価をしている。後者については、前回の値（73%）を大きく上回る結果となった。また、別問で実技系科目が仕事で役立っているかと問えば、これも84%が、「おおむね役に立っている」を含め、役に立っていると答えた。

加えて、教育・研究環境も、「おおむね満足」を含めて90%が満足していると答えた。

高専卒業時において、学生が最も身につけておかなければならない能力については（複数回答可）、前回同様に、「専門の基礎知識（19%）」を挙げる回答が多い。これらに続くのは、「プレゼンテーション能力（15%）」、「専門知識の応用力（14%）」、ならびに「学習意欲（14%）」であった。逆に、選択率が低かったものは、「専門知識の応用力（7%）」と「健康・体力（6%）」であった。

以下は、専攻科修了生に対する調査結果である。母数が少ないため、明確に傾向は捉えられないが、得られた回答には次のような特徴がある。

学習・教育到達目標については、不要な項目を指摘する回答はなく、取り入れることが望ましい事項を指摘する回答は13%であった。この値は、前回結果より低く、今回の本科卒業生の回答に比べても低い。

科目の評価についての結果で目立つことは、次の2点である。一つ目は、一般教育科目（文系）における肯定的評価の割合が専攻科修了生の方（50%）が本科卒業生に比べて高いこと。もう一つは、これとは逆に、専門科目（座学）における肯定的評価の割合は、専攻科修了生の方（61%）が本科卒業生に比べて低いことである。こうした結果は、前回には見られなかった。これらの他は、上述した本科の回答の特徴と概ね同じである。

業務遂行能力における大学学部卒業生との比較について、前回は、違いがあるという回答と違いはないという回答が、ほぼ同じであった。しかし、今回は、違いはないという回答が全体の3/4を占めた。

専攻科修了生が優れている点としては、「グループディスカッション能力」が1名から挙げられた。一方、専攻科修了生が劣っている点としては、「研究・開発に対する取り組み姿勢」が1名から挙げられた。

今後の有明高専がさらによくなるためのアイデアについても、貴重な意見が多数寄せられた。中でも、「より現場に密着した実技系科目を増やしてほしい」、「大勢の前でプレゼンする場を多く設けるべき。また、フ

アシリテーションなどの会議の中心となれるような能力を開発する授業を取り入れるべき」など、教育活動に関する意見が多かった。

2.6 企業アンケート

現在までに実施した企業アンケートの実施状況一覧は表2-6-1のとおりである。企業アンケートは2年ごとに実施しており、今回は平成27年度に実施したアンケートの分析である。

表2-6-1 企業アンケートの実施状況一覧

	実施時期	調査企業数(社)	回答企業数(社)	回答率(%)
平成15年度	平成15年11月	500	153	31
平成17年度	平成17年12月	500	151	30
平成19年度	平成19年12月	442	159	36
平成21年度	平成21年8月	424	158	37
平成23年度	平成24年9月	422	137	32
平成25年度	平成25年9月	354	120	34
平成27年度	平成27年9月	335	103	31

【回答数】

回答者は全体で103社であり、平成19年度の159社をピークに毎回減少している。調査企業数全体[335社(平成25年度は354社)]の約31%(平成25年度は34%)にあたる。平成19年度以前までは、回答方式はマークシート等による紙媒体のみ、平成21年度と平成23年度は、WEB入力およびマークシートの2種類に変更し、前回(平成25年度)そして今回はWEB入力のみとした。調査企業数は毎回減少しているにも関わらず回答率は30%~37%を維持しており、WEB入力方式に変更したことで一定の成果が見受けられるが、依然として低回答率である。回答率をアップするため、今後もアンケートの実施時期、調査企業の選定、回答方式などを検討する必要がある。

【JABEE認定校の意識に関する設問】

採用に関して、JABEE認定校の卒業生であることを『意識して行う』と『ある程度意識して行う』を合わせて20%となって、前回(平成25年度)の38%を18ポイントも下回っている。『ほとんど意識しない』という回答は59%であり、前回(平成25年度)の41%よりも18ポイント上昇しており、前々回(平成23年度)の52%に比べても7ポイント以上上昇している。つまり、JABEE認定校の意識度があまり上昇してない。また、JABEE認定校出身者と非認定校出身者において、『(待遇などに何らかの差をつける)計画はない』という回答は83%であり、前回(平成25年度)の80%、前々回(平成23年度)の82%とほとんど変化がなく、平成21年度以前と比較してもこの傾向に大きな変化はみられない。したがって、企業側から見ると、JABEE認定校に対する意識もあまり高くもなく、必然的に待遇面も反映されるところまでには至っていないと判断される。

【卒業生に関する設問】

入社時の実力について、『満足』が27%であり、前回(平成25年度)の29%よりも2ポイント減少しており、前々回(平成23年度)よりは10ポイント程度高い。『おおむね満足』が54%[前回(平成25年度)49%、前々回(平成23年度)57%]、『普通』も17%[前回(平成25年度)19%、前々回(平成23年度)25%]となっており、全体的に“満足度”は安定して高いと言える。

また、入社後の仕事ぶりについては、『満足』が32%であり、前回(平成25年度)の27%よりも5ポイント高く、前々回(平成23年度)よりも15ポイント程度上昇している。『おおむね満足』は51%であり、前回(平成25年度)の55%、前々回(平成23年度)の66%に比して少しずつ低下している。『普通』については、今回は14%であり、前回(平成25年度)の16%よりもやや減少している。つまり、総じて、仕事ぶりについても“満足度”が上昇している。

【修了生に関する設問】

入社時の実力について、『満足』が33%となっており、前回（平成25年度）の23%から10ポイント上昇、前々回（平成23年度）の45%からは12ポイント下降している。『おおむね満足』は51%であり、前回（平成25年度）の49%から2ポイント上昇、前々回（平成23年度）の57%からは6ポイント低下している。『普通』も16%であり、前回（平成25年度）19%、前々回（平成23年度）の24%と比べて少しずつ減少している。全体的に、“満足度”は安定して高いと言える。入社後の仕事ぶりについては、『満足』が39%となっており、前回（平成25年度）の48%からは9ポイント減少しており、『おおむね満足』は39%であり、前回（平成25年度）42%、前々年度（平成23年度）44%に比べてやや下回っている。こちらも全体的に“満足度”は高評価と言える。

【取得してほしい資格に関する設問】

複数回答のため、108件の回答が得られ、前回（平成25年度）の115件とほぼ同数であり、前々回（平成23年度）の60件よりも1.8倍となった。各業種に対応した資格が回答されており、取得してほしい資格については多岐に及ぶ。また、得られた結果は、回答が得られた企業業種に因るところが大きい。企業側から見れば、約6割が在学期間中に可能であればその業種に必要な資格取得を望まれているようであるが、学校側から見れば取得に向けての対応は難しい状況かと思われる。

【専攻科修了生と大学卒業生の比較に関する設問】

回答数 103 社のうち、『専攻科生の採用実績がない』が 22 社であり、全体の 21%を占めている。前回（平成 25 年度）の 24%（120 社中 29 社）、前々回（平成 23 年度）の 32%（121 社中 39 社）に比べてそれぞれ 3 ポイント、11 ポイント採用実績が増加している。専攻科生の採用実績がある 81 社の回答を分析して見ると、『（業務遂行能力の差は）ないと思う』が 57%であり、過半数を超えており、前回（平成 25 年度）の 62%よりは 5 ポイント低下はしているが、前々回（平成 23 年度）の 57%と同じである。

『あると思う』が前回（平成 25 年度）の 20%から 12%へと 8 ポイント、前々回（平成 23 年度）の 15%よりも 3 ポイントそれぞれ減少している。その分、『少しあると思う』が前回（平成 25 年度）の 19%から 31%へと 12 ポイント、前々回（平成 23 年度）の 28%に比しても 3 ポイントそれぞれ上昇している。『あると思う』と『少しあると思う』を合わせると過去 3 回のアンケートでは 40%前後となっている。

『あると思う』および『少しあると思う』と回答した企業に、その差異を尋ねたところ、32 件 [27 件（平成 25 年度）、30 件（平成 23 年度）] の回答を頂いた。その内容は多岐にわたっており、『専攻科修了生が優れている点』については 25 件 [18 件（平成 25 年度）、22 件（平成 23 年度）]、『専攻科修了生が劣っている点』については 5 件 [7 件（平成 25 年度）、5 件（平成 23 年度）]、『その他』として 2 件 [2 件（平成 25 年度）、3 件（平成 23 年度）] のご意見を頂いた。『専攻科修了生が優れている点』としては、前回以前からも高評価されている「実践的な能力が高い」、「即戦力としての経験や能力が高い」や「専門分野における深い知識があり、もの作り能力が高い」に加えて「コミュニケーション能力が高い」、「現場での指導力が高い」等が挙げられている。

一方、『専攻科修了生が劣っている点』としては、「対人的なコミュニケーション能力が低い」、「語学力が弱い」という指摘が見られる。専攻科が設置された平成 14 年度から平成 24 年度まで、TOEIC400 点相当を取得することが修了要件の 1 つとなっており、ある程度の英語能力のレベル維持の一助となっていた。平成 25 年度から平成 27 年度まで、専攻科プログラム修了要件から除外され、プログラム修了要件（JABEE 取得要件）[=専攻科修了要件+学位+TOEIC400 点相当] の 1 つとなり、来年度からはさらに、そのプログラム修了要件からも除外されることになる。一般教育科の英語教育や専門学科（コース）の工業・技術英語等を中心として、学生の英語能力向上に向けての対策が必要と思われる。

【学習・教育到達目標に関する設問】

回答数 103 社のうち、学習・教育到達目標における不要な項目は、『ない』が 91%（94 社）を占めており、前回（平成 25 年度）の 88%（106 社）よりは 3 ポイント増、前々回（平成 23 年度）の 96%（101 社）よりは 5 ポイント減となっている。総じて、高いポイントを維持している。他方、『ある』が 9%となっており、前回（平成 25 年度）の 12%よりは減少し、前々回（平成 23 年度）の 4%よりは高い。一方、本校の教育プ

プログラム目標において、企業の立場から、取り入れることが望ましい事項がありますかの項目に対して、『ある』が73%（平成25年度は77%）、『ない』が27%（平成25年度は23%）となっており、全体の約4分の3が望ましい事項があるとの回答が得られた。本校の学習・教育到達目標が社会に対して適切に設定されていると判断される。

【自由意見】

今回は、17件の意見が寄せられ、前回（平成25年度）の22件よりは少ないが、前々回（平成23年度）の17件と同じであった。内容は多岐にわたっているが、上記設問事項に関連した内容や高専卒業生・修了生が有する専門知識、技術力、統率力等における長短所の指摘、要望・期待感等、貴重な意見として真摯に受け止める必要があると思われる。

3. あとがき

本校の教育システムならびに教育プログラムを継続的に改善・向上するために、本委員会では平成14年度から毎年アンケートを実施し、集計、分析そして報告活動を展開しています。本調査報告書は11回目の発刊を迎えます。今回は平成27年1月から平成27年9月までのアンケート実施分を主として整理し、前回（第10回報告書）と対比して分析したものです。

今回のアンケート集計・分析の結果、継続的改善という観点から評価すると、本校の教育システムならびに教育プログラムは、全般的に良好な状態を維持もしくは向上していると言えます。ただし、改善あるいは経過観察を要する事項も依然として見受けられます。

例えば、卒業時アンケートでは、準学士課程の【教育全般の総括に関する設問】において、【一般教育】では、過去3年間の『満足度』が上昇下降を年度ごとに交互に繰り返しており、【専門教育】では、高ポイントを維持している学科が複数あるのに対し、高低差が大きい学科もあります。また、【自分自身に実力がついたと思うか】の設問に対しても過去3年間で「身に付いたと思う」と回答した学生が多い学科は40ポイントを超えているのに対し、低い学科は20ポイント程度に留まっており、しかも年々低くなっているのも懸念されます。

専攻科修了時のアンケートでは、学士課程の【教育全般の総括に関する設問】において、【一般教育】では、『満足度』のポイントが大幅に上昇しているのに対し、【専門教育】では、『満足度』のそれが急減しているのも今後、原因究明と改善が必要であります。

企業アンケートにおいて、【JABEE認定校の意識に関する設問】では、過去3回のデータからも認定校出身者と非認定校出身者の「(待遇などに何らかの差をつける)計画はない」という回答率が80%を超えており、企業のJABEEに対する意識や認識も低いと判断され、必然的に待遇面にも反映されないと思われれます。本校は、平成27年度にJABEE認定継続実地審査を受審し、認定可(認定期間：2015年4月1日～2021年3月31日の6年間)の審査評価結果を受けたばかりであり、今後、JABEE認定継続を受審するかも含めて検討が必要と思われれます。

卒業時アンケートにおいて、毎年、『教育実状』に比べて、『達成度』のポイントにかなり低い傾向が見られます。今回のアンケートではその格差が全体的に縮まっており、良好な状況にあると言えます。また、専攻科修了時アンケートの方では、毎回、『教育実状』、『達成度』ともに60ポイント台と低い傾向にあります。今回は両者とも15～20ポイントも上昇しており、こちらも良好な状況にあると言えます。

教職員におかれましては、関係組織・部署において、以上のようなアンケート結果が得られた要因・背景をさらに分析するとともに、よりよい改善・向上を目指して地道にそして着実に成果が得られるような取り組みを遂行して頂きたいと思います。

「まえがき」でも述べましたように、本調査報告書は、学校の教育システム・プログラムの継続的改善・向上に資することを目的としています。本報告書が関係組織・部署、各教職員における改善・向上に貢献できることを切に願っております。本校の教職員1人1人が、本調査報告書を熟読して頂き、本校の教育システム・教育プログラムに対する学内外からの評価を適確に把握することが大事であり、そして、各関係組織・部署等で共通認識に基づいた改善・向上の具現化が実現できますことを期待致します。

最後に、各種アンケート調査にご協力頂いた関係各位に深く感謝の意を表します。

学校運営検討委員会

委員長 南 明宏 (機械工学科)
副委員長 谷口 光男 (一般教育科)
高松 竜二 (電気工学科)
石川 洋平 (電子情報工学科)
出口 智昭 (物質工学科)
加藤 浩司 (建築学科)
事務担当 原賀 亮治 (企画情報係)